

主語が「子ども」の ICT 活用を推進するシームレスな校内研修

令和3年度入学

熊本大学大学院 教育学研究科

教職実践開発専攻 学校教育実践高度化コース

江藤 亜矢子

実践報告書要旨

2018年に、勤務していた中学校が熊本市のタブレット先行導入校としての研究指定を受けた。タブレットに加えて電子黒板や Apple TV など、ICT 環境の急速な整備に多くの職員が戸惑いを感じていたことを覚えている。私自身も、ICT の環境整備に伴う授業改善に試行錯誤しながら、ICT のスキルの習得に不安を感じていた一人である。当時は、ICT の可能性と利便性を理解しながらも、教師のスキルの問題が大きな障壁となる事が多く、勤務校でも「とにかく使う」「やってみる」を合言葉に、校内研修では様々な実践例が紹介された。学習に便利なツールとして活用することを浸透させるためには、まずは使う場面を増やすことを第一にした研修内容が重視され、「教師が授業で使うことに慣れる」という目的はある程度達成されたように思う。研修の目的を共有して全職員で取り組む組織力があれば、急激な時代の変化にも対応し得ることを実感した。

情報通信総合研究所特別研究員で、文部科学省 ICT 活用教育アドバイザーを務める平井聡一郎氏は、GIGA スクール構想のねらいは、これからの予測困難な未来社会の担い手として必要な資質・能力を効果的に育成することにある、そのための最も強力な学習ツールとなる ICT 機器を、すべての子どものために活用できる環境に整えることであると述べている。この構想を表す GIGA が、「Global and Innovation Gateway for All」(すべての子どものための、世界につながる革新的な扉)であることは、現場の教員には浸透していない。教師は、子どもが使い手となる ICT 活用授業を展開し、子どもの能力を拡張させる学習ツールと捉えて授業改善を行うという、本来の意義を理解する必要がある。一人一台端末の導入が、「for All」の授業改善につながるものであるという共通意識のもとで教師の主体的な学び合いが実現できれば、ICT 活用授業の本来の意義を共通理解として持つことのできる教師集団となり得るのではないかと考える。

新学習指導要領では、情報活用能力を、「学習の基盤となる資質・能力」の一つとして位置付けている。教え込む授業から学び取る授業へ、いわゆる「主体的、対話的で深い学び」の実現のために授業改善が求められる中、ICT 活用は効果的な手段の一つとなる。子どもが自らの課題を発見し、学習に必要な情報収集、分析を行い、知識を活用しながら学びを深めるには、ICT の使い手が子どもであるという点が重要なポイントとなる。これからの校内研修では、主語が「子ども」の ICT 活用をイメージしながら授業改善に取り組む内容にシフトしたいと考えた。ICT 活用に関する研修においては、若手もベテランも、教職経験に関わらず、新たな視点から授業づくりに関する意見を交わしやすい。また、ICT 活用という視点においては、他教科の取組からアイデアを獲得できることも多く、教科間の積極的な学び合いの必要性を感じることができる。本研究では、教師の積極的な学び合いを促進することによって学校全体で ICT 活用授業が充実し、実践につながる実感をもつことができる校内研修を目指した。校内研修の課題とされる時間的、心理的負担を解消するために、研修に ICT を活用し、全体研修とインフォーマルな学びの場を効果的に設定することで、教師の日常の学び合いを促進したいと考える。そのような、いつでもどこでも学べる環境として、研修と実践とのつなぎ目のない、シームレスな校内研修を実現する新たな研修の形を示したい。

【キーワード】 GIGA スクール構想 主語が「子ども」の ICT 活用 シームレスな校内研修